

ふみの会 ニュース

- 発行 ふみの会広報部
- 発行日 2005年10月29日
- 連絡先 藤川博樹
〒115-0045 北区赤羽1-48-3-203
Tel03-5249-5797 Fax03-3901-6090
- 編集 塚原、藤川、蒲原雅、佐藤、蒲原直
- ホームページ <http://www.mdn.ne.jp/~fumi/>
- メールアドレス <mailto:fumi@mdn.ne.jp>

No.287

11月行事日程

■原稿募集中

原稿はテキストにして下記へメールで送ってください。
ワード、一太郎文書も可です。(ただし、書式は保存されません)

kamo@sun.email.ne.jp

エッセイ: 5枚 (2000字)

書評: 5枚 (2000字)、詩: 2枚 (800字)

小説: 10枚 (4000字) 目安

※会員の原稿が優先されます。入りきらない場合など、適宜編集、次号まわしにすることがあります。

■ふみの会ニュースの購読料は、年間1200円(切手可)です。



ジャマイカ土産ZionブランドのTシャツ: B・マーリイ像



藤川博樹さんの新刊

「知力を鍛える！
パソコン自由研究」

汐文社 1200円

インターネットを使って学校の「自由研究」に使う情報を集めよう、という案内書。その手引き、コツなどを易しく紹介。

■小泉首相が靖国神社を参拝した。常づね思うのだが、そこらのお稲荷さんにお参りにいったのではない。しかし、神社というと、それこれもみんな宗教だからというので違いが鮮明にならない。なにかこうヤスクニの持つ本来的な政治的狂暴性を端的に表現できないか、と考えた。そうしているうちに、靖国神社とはつまるところサテイアンではないか、と思いついた。「小泉首相がヤスクニ・サテイアンを参拝した」とすれば、事柄の本質はより鮮明になる。まがまがしいイメージも描きだせる。■さて、世論は二分されている。だが、中国や韓国の批判に反発し、「外国の干渉を受けることではない」として、小泉を支持するひとが増えているようだ。危険な徴候だと思ふ。こんなふうになしヨナリズムを刺激するのは民主的な政治家のやることではない。ヤスクニ・サテイアンは、万世一系の天皇を神とあがめる大和民族の民草を、盲目的に国家に奉仕し、奴隷的な死をむしる喜びとするような、狂信の体系によって洗脳した。その仕掛けは日本の土着の思想によったのではなく、西欧の民衆がキリスト教によって精神的な統一がはかられている状況を、明治政府が天皇を現人神化することによって模倣したものだった。八百方の神々のおおす邦にヨーロッパ的な一神教をいわば国家宗教として民衆に強制したのである。■中国や韓国の批判の背景を考えると、に、欠かせない視点は、先の戦争をあたかもゲームを論じるように、対等の相手同士の争いであったかのように論じてはならない、ということだろう。朝鮮半島も中国大陸も先の大戦のときには近代化以前の社会体制であった。数々の偶然によって先に近代化をなしとげた日本は、西欧諸国がアジアやアフリカ、南北アメリカで行った通りに、文字どおり相手を蹂躪したのである。そのことがどれほど相手を傷つけたか、ひとつの例をあげよう。(3ページへ続く)

おれたちの村

⑩

蒲原ユミニ

8 意外なできごと (つぎ)

「みなさん、先生の言うことを聞いてください。勝手なことをしたら、プールはおあずけですよ、危ないから」

みんな、しゅんとなった。教頭先生は「その通り」という顔でうなずいた。

その後は、桜田先生の指示通り水中じゃんけんやプールサイドに手をつけてバタ足練習などがスムーズにできた。みんながじゆうぶん水なれたところ、先生はみんなをいったんプールサイドに上げ、5分間休ませた。

休憩時間が終わると、桜田先生はこんどはハンドマイクを使ってしゃべり始めた。

「次は、泳力チェックです。みなさんがどのくらい泳げるか、先生に見せてください。進めるところまでいいのですよ。プールの底に足がつ

いたら、そこからプールサイドにあがってください」

この方がずっとよく聞こえる。みんなは教室にいるときのように先生の話に耳をかたむけた。桜田先生はみんなをプールのたての方に連れていった。8コース25mである。先生はちよつと首をかしげてみんなに聞いた。

「8コースだけど、子どもだから女子と男子が分かれて10人ずつ泳ぎましょうか」

みんなは「いいです」と言った。圭子が、

「男子は11人んです」

と言った。桜田先生はちよつと困ってみんなに聞いた。

「男子は11人で泳いでいいですか」

「はい！」

「では、女子から泳いでもらいましょう。自分の得意な泳ぎでいいですよ」

女子は「ええ？」と言いながらもうれしそうにプールに近づいた。

「飛びこみたい人は、飛びこんでいいですよ」

と言って桜田先生はピーツと笛をふいた。

キヤアキヤアとかん声をあげ、女子はドボンとプールの低いプールサイドから入った。飛びこみをする女子はいなかった。10人の女の子たちは大騒ぎで泳ぎ出したが、ほとんどは5m前後。運動神経のいい圭子だって20mいかなかった。

男の子の順番が来た。ほとんどの男子はまずドボンとプールに入った。飛びこみをするために上に残ったのは陽平と泉の2人だけ。

笛の合図で、陽平は足からボツチャーンと元気よく飛びこんだ。ところが、泉は足で地をけりきれいな弧をえがいて、まっすぐ伸ばした手からとびこんだ。



「わあっ！」
と、女の子の感動のため息。陽平は
気にせず犬かきで泳ぎ出した。泉は
クロールである。よく伸びた手が魚
のひれのように水をかき、息つきも
きれい。
泳ぎの得意な方の正夫とヒロキ
は20mほどでギブアップしたが、
泉は25mでターンしており返し
てきた。プールの真ん中あたりで楽
しく泳いでいた陽平に、むらむら競
争心が湧いてきた。陽平は今までせ
いぜいプールの真ん中くらいまで
しか泳いだことはないのだが、両手
ではげしく水をかきだした。前方め
ざして。
しかし、ようやくと25mにたど
りついたところで力がつきた。陽平
としては去年の倍の進歩だが、あま
り満足感ではなかった。泉が50m泳
いでプールサイドに上がっていた
から。

む。守やヒロキも先生におんぶした。
陽平もおんぶしたかったのだが、な
ぜかできなかった。少しはなれたと
ころで、いっしょけんめいクロール
の練習をした。泉のフォームを思
い出しながら。
自由時間も終わり全員プールか
ら上がった。整理体操をし、女子か
らシャワーに向かった。教頭先生も
帰っていった。
男子も女子の後に続いてシャワ
ーに向かった。こんな時、陽平は帰
るのも一番なのだが、きょうはちが
った。クモを見つけたのだ。黄色と
黒のしま模様様の足の長いヤツ
がフェンスにいたのでつかまえた。
プールサイドに泉が一人残って
足を洗っていた。陽平のクモが逃げ
出し、すうっと糸を引いてプールの
方へ飛んだ。
キエッ
ひと声上げ、泉がプールに落ちた。
そして、あんなにかっこうよく泳げ
た泉が水中でもがきあつぷあつぷ
しているではないか。陽平はぼかん
と見ていたが、冗談ではなさそうだ
とわかるやいなやプールに飛びこ
んだ。泉に手を差し出すと、泉はそ

の手をつかみ、ようやくプールに足
をつくことができた。それから、よ
るよるとプールから上がっていつ
た。さつきのクモもよろよろとプー
ルサイドのへりにつかまった。陽平
は弱ったクモをもうつかまえる気
はしなかった。そして、泉がクモを
見てびっくりしたのだとわかった。
陽平の天敵、泉の意外な弱点を知っ
ておかしくなった。けれど、クール
で運動神経ばつ群の泉がよろよろ
と帰っていった姿はかわいいそう
もあつた。
(まあ、きょうのことはだまって
やるか)
陽平の『武士の情け』である。
(つづく)

■若いころ東北を旅したことがある。気楽なひとり旅だったが、途中、あるお年寄り夫婦と言葉を
かわすようになった。ローカル線のなかはあたたかく、しばらくは和やかな雰囲気だった。が、お
ふたりは、わたしが佐賀県の出身であることを知ると、いきなり顔を曇らせてしまった。そして、
言われた言葉は忘れられない。「佐賀の人間の歩いたあとには草も生えん」この言葉はそれ以降し
ばしば耳にするようになるのだが、その由来にわたしが気付くのはずっと後になってからだった。
そして、それが戊辰戦争の記憶によるものだとということが判ってからは、「近代化」というものの
意味を深く考え直すようになった。■最近の体育学的な研究によれば、日本人は明治以前までは
「走れなかった」そうである。社会の軍国主義化が進み、国民皆兵制がとられ、軍事訓練がほとこ
されることによって、日本人は「走る」肉体を獲得したという。戊辰戦争は薩摩、長州、土佐、肥
前の西欧的な軍事訓練を受けた軍隊と、近代化以前の封建制のなかに生きていたひとたちとの内戦
だった。薩長土肥の軍隊が相手にいかに蹂躪したか、会津などはさながら地獄図であったという。
佐賀軍はいちはやく自藩に反射炉を築き、最新鋭の阿姆斯特朗砲を備えていた。近代的な装
備と軍事訓練を受けた集団にとって、武士の抵抗など赤子の手をひねるようなものだったろう。ま
して当時の女性や一般民衆は走る肉体をもつていなかったのだ。■踏みじられたものの記憶は1
00年たっても消えない。それは伝承ということではない」と冷たく言う前に、中国や韓国の批判の背景にあ
るものをもう一度考え直す必要があるのではないか。(K)

混沌市の高齢者たちは元気である。暇も金もあるが、いろんな事情で運動が足りなくな

る。足腰にガタが来ていたり心臓に障害があったり、ただ単に肥満だったりするからだ。そういう老人たちに安全に運動する場所を提供しようというのがスポーツジムというやつである。昔はそういう所に来るのは若い者と決まっていた。しかし少子高齢化は思いのほかに早く進んでいる。ジムの経営者は青年層や子どもだけでははや経営が成り立たないことを知っている。彼らは既に高齢者向けのパンフレットを全戸配布したり、無料招待券を乱発して市場開拓を進めている。温泉・グルメをからませ、あの手この手で高齢者を呼び込もうとする。今日も高齢者たちをスポーツジムへ運ぶ専用バスが駅前通りを走って行く。

高井峰雄はその女性を「いちちょうら姫」と呼んでいた。彼女がいつ見ても同じ水着だったからだ。同じ高齢者にしても周囲の女性たちは決して毎日同じものは着てこない。第一水着は生地が痛むので激しく脱水することが出来る。従って一晩では乾かないから複数を使いまわすしかないのだ。

(彼女はたぶん、同じデザイナーの水着を数枚

持っていてそれを取り替えて着ているんやろう……しかし?)

気に入ったデザイナーだったからそればかり着ている、というのはいわゆる。しかし色が種類である必要はない。黒をベースに銀灰色のラインが入った水着は確かに渋いが、そのラインの色だけでも変えればいいのだ。すべて同じというのは偏屈すぎる。

(ワシとしては、彼女が貧乏で水着を一枚しか持っていない方が面白いけど……)

峰雄が興味を持っているのはもちろん水着ではなく、その中身だ。たぶん六〇才を過ぎているだろうその『一張羅姫』は、昔はすい美女だったことが容易に想像できた。しかも長い足と張りのあるヒップライン、くびれたウエストラインと適度にふくらんだバストラインはまるでモデルのようで、渋いデザイナーの水着が映えるのだ。

そのくらの女性だからライバルは多かった。何人かの男性が声をかけているのを見かけたことがあるが、『姫』は誰とも親しくしていなかった。自分のルックスに引け目のある高井峰雄は彼女に声をかけることさえも出来なかった。だいたい彼は女性にもてたことがなく、見合い結婚はしたが妻が家にいたのは数ヶ月だけだった。それから数十年、こんな

に気持ちが高ぶったことはなかった。

ひよんな時にチャンスが来た。早朝覚醒してしまい、日課がどどん前倒しになって午後の早い時間にジムに来た峰雄は、いつもより早い時間にプールを上がった。ロッカールのある二階に上がろうと階段を登っていくと、上から降りてくる人がいた。メガネがないと視界三〇センチの峰雄にも、そのきれいな足持ち主が『姫』であることが分かった。峰雄の心臓がドキンと鳴った次の瞬間、思いがけないことが起こった。『姫』の足が滑ったのだ。

「あーれーッ！」

彼女は素っ頓狂な声をあげて滑り落ちた。峰雄は体を低くしてその体を受け止めた。学生時代はラグビーのバックスを務めていた峰雄には簡単な芸当だった。柔らかな『姫』の体は案外ずっしりと重かったが、それを抱きしめている間は峰雄にとって至福の時間だった。

「失礼しました、どうも申し訳ありません、お怪我しませんでした?」

『姫』はハスキーな声で峰雄を氣遣った。

「大丈夫です、ただ……」

「ただ?」

「こんな時につけこむようで悪いですが、お茶でもつきあってください」

「ええ?」『姫』は驚いた様子だったが、すぐにニコリ笑った。

「上がるまで待っていてくれます?……四時には出てきますので。それと、お茶よりはお酒がいいですね」

高井峰雄はしばらく自分のかした大ヒットに酔っていた。ロッカーでどうやって着替えたのか覚えておらず、いつの間に四時になったのか分からなかった。ジムの入り口に立っている彼の前に『姫』が笑顔で近づいた。

混沌駅前の「京樽」は時間が早いせいかガラガラだった。彼女は青いワンピースに花柄のスカートを巻いていた。スイミングキャップに隠れて見えなかった頭髮は真っ白だったが、彫りの深い顔にはそれがプラチナブロンドのように見えた。彼女は日本酒、峰雄はビールで乾杯し、お互いの身元確認のような会話が始まった。

「定年になってから、ホンマにすることがなくなりまして」峰雄は関西なまりを隠さずに言った。

「IT関連のボランティアなんぞやっていますが、今度は医者に血糖値が高い、コレス

テロールがどうやこうや、みたいなこと言われましてなあ、仕方なしにジムに来ていますんや、ほんまに歳は取りたくないもんですわ」

「歳だなんて、高井さんはお若いですよ」

「エリーさんこそ……」

『「張羅姫」はエリーと名乗った。本名かどうかはわからない。彼女は混沌駅の隣の南混沌駅から徒歩数分のマンションに住んでいるという。いろんな客商売をやっていたが数年前に引退したらしい。それ以上のことは分からなかった。彼女は聞き上手でこちらの話を聞き出すのはうまかったが、酒が入っても自分のことはあまり話さなかった。』

「それじゃ、生き物が待っていますのでこれで失礼します」

「一時間ほどしてそう言われ、『姫』は帰って行った。勘定は峰雄が払った。

それから彼らは時々京樽で軽く一杯やることが多くなった。何度目かの席で峰雄が、

「エリーさん、こんなボクとどうして付き合ってくれはるんですか？」

と尋ねると、『姫』はこう言った。

「あなたも鈍感ね……私があんな階段で滑ると思っ……」

『姫』は悪戯っぽい笑顔を見せて言った。

「……私が仕掛けたのよ。いつも私のことジーツと見てたくせに、いつまでたっても声をかけてこないんだから、しびれが切れちゃっ

たの……わたし、あなたみたいに鬼瓦がくしやみしたような顔が大好きなのよ」

「なんだ、そうだったのか！と、峰雄は大笑いした。その日、彼は『姫』をホテルに誘った。タクシーで五分の国道沿いにあるホテルで彼らは結ばれた。予想通り『姫』の主導でこっちはまく進んだ。

ホテルのベッドの上で峰雄は、自分が彼女を『「張羅姫」と呼んでいたことを話した。エリーは「ああ……それね」と苦しそうに応えた。

「年金暮らしたからね、そうそうファッションにこだわってもいられないの」

「じゃあ……」

「そう、一張羅だったのは本当よ。いいものを長く使うのがわたしのやり方だから」

そう言った後で彼女は、ケラケラツツと笑った。

「なーんて、かっこつけてもダメね、いっちゃようら水着の「張羅姫」か、そりや当たってるわ」

「なあ、姫さま」ひとしきり笑って峰雄は慎重に言った。

「こうなつてしまったから言うんやないけど、ワシにあんたの生活の面倒みさせてもらえんやろか……」

「あーっ、こんな時間」

エリーはホテルのデジタル時計を見て叫んだ。

「生き物に餌をやんなきゃならないからもつ帰るわ、その話はまたあとでね」

彼女はバタバタと身支度し、ホテルを出て行った。

（生き物でなんや、犬や猫やないやろ……やつぱり男ちやうんか？）峰雄の胸の奥に嫉妬の炎が燃え上がった。

翌日、高井峰雄はジムへやって来たものの、中には入らず隣りのビルの陰に隠れた。そして『姫』が出てくるのを待つて後をつけた。

彼女の言ったことに嘘はなく、『姫』は南混沌駅から商店街を抜け、信号を渡った国道沿いのマンションに入って行った。幸いマンションはオートロックではなかったのので後を追って入り込むことが出来、エレベーターもなかったのので彼女の後について階段を登り、三階まで行くことが出来た。彼女がガチャガチャと鍵を開け、扉を開いたところで峰雄は階段室から飛び出した。

「あんた、なにすんの！」

『姫』を押しつけるようにして中に入り、

靴を脱ぎ捨てながら狭い廊下を走って峰雄は一番奥の部屋のドアを開けた。まだ日差しのある窓辺の光りの中にベッドが横たわり、そこに異様な生き物がいた。それは口のようなものをバクバクと動かしているのて生きていると分かるものの、人間の面影はなかった。

「それがわたしの亭主よ」後から『姫』が言った。「いや、亭主だった生き物……かな」

「どっついうことや？」

彼女はほつりほつりと物語った。長い客商売の結果彼女に残ったのは借金だけだった。それを帳消しにしてくれるという鬼瓦がびつくりしたような顔の客と形だけの結婚をした。

その男は極道だった。あちこちに女を作り、毎晩酔っ払っては暴力を振るった。ある夜、迎えに来いと言われて夫の車で混沌市内の酒場に行くと、夫は彼女を愚図だの売女だのとのしり、殴りつけた。眠り込んだ夫を後部座席に乗せて走り出したが、彼女はつくづくいやになった。国道を走っているうちに心中を決心してガードレールに突っ込んだ。車は大破し、夫は外に投げ出され四肢損傷・顔面擦過傷・二〇数箇所の骨折をした。しかし彼女はメルセデスの安全設計に守られてほとんど無傷だった。

「その結果がこれよ、命に別状ないから退院は出来た、でも、生きてるだけ」

「そんなもののお守りで一生暮らすんか、あんたは？……それでええんか？」

「さあね、でもこうなつたのはわたしの責任だもの、最後まで生かしてあげたいの。いわばこれが復讐を兼ねた私の趣味ね」

高井峰雄にはもちろんそんな趣味を理解しなかった。だからそれきりジムにも行かなくなった。混沌市のあるジムで、『張羅姫』は生き物を思いながらまだ泳いでいるのだから。

空木岳に登る(二)

中井 豊

一三時二〇分、待望の水場に着く。地図には「常水」とある。樋(と)いから澄んだ水が豊かに流れ落ちている。喉をうるおしていると、嶋倉さんが写真を撮っている。辺りはトリカブト、フウロソウ、シナノキンバイ、ウスユキソウ、ハハコグサ、トモエシオガマ、それにトラノオなどの高山植物で小さなお花畑になっている。晴れ渡っているので、どの花も鮮やかな色彩をしている。中央アルプスの花は早いと思われるが、七月末でも見ることができるとは幸運なことだ。

嶋倉さんは年末になると、一年間に蓄えた山の写真を選び、デスク・カレンダーにしてプレゼントしてくれる。楽しみである。

水場でひとときを過ごし、数分で木曾殿越(二五八〇m)に到る。木曾殿とは木曾義仲のことらしい。立山一ノ越、槍ヶ岳硫黄乗越に次ぐ高さの乗越(のっこし)だという。ここには木曾殿山荘がある。中で訊くと、

「家族で経営している」
とのことだった。辺りは花崗岩質の砂礫である。

ここでも暫く休み、「空木岳へ」の道

標に従って、いよいよ切り立つ尾根道を登り始める。時刻は一四時過ぎ。台風一過の上天気だが、風が吹きつけて来るため、緊張感を伴いながら、砂礫の痩せ尾根を行く。急な登りだから、ぐんぐん高度が上がる。

三〇分ほどで、木曾殿山荘が一〇〇mほど下に小さく見えるようになる。尾根筋の北側には東川岳(二六七一m)が聳えているので、稜の高度がよく分かる。気が付くと、北に宝剣岳(一九三二m)が黒っぽく鋭い頂上を屹立させている。二度登ったことがあるので、その折りのことを思い出し、懐かしくなる。

木曾駒ヶ岳頂上(二九五六・三m)には三度立ったことがある。最初は確か一九八三年の夏だった。数学仲間の芦田さん、松岡さん、木戸さんと上松から一四時間ほどで山頂を日帰りし、翌日からは勉強会をした。二度目は妻と小学生だった二人の娘と同じコースを登り、頂上木曾小屋で一泊して、中岳を経て、宝剣岳を通過し、千畳敷カールからロープウェイで下りた。三度目は嶋倉夫妻とロープウェイで登り、頂上と宝剣岳を往復し、ロープウェイで下りた。この時は恵那山

へ登る準備として登った。

木曾駒ヶ岳方面の写真撮ったりし、休み休み急登を進んだ末、花崗岩の巨大な造形の立ち並ぶ場所に出た。その辺りが空木岳頂上かと思っていたのが、当てが外れ、更に登りは続き、岩場に入る。かなり疲労を覚えているのに、梯子や鎖場が始まる。既に一六時だ。

不意に山頂に出た。砂地に身の丈ほどの花崗岩が幾つか並んでいる。「空木岳」標高一八四六・四mの標識がある。一六時二〇分になっている。下に天竜川が流れ、駒ヶ根市の家々が見える。東側へ少し下りた場所に駒峰ヒュッテが見える。ここが、今夜泊まる山小屋だ。日は既に傾き、夕景である。南に見えていた大きい山は南駒ヶ岳(二八四一m)であることが分かった。明日は縦走路を、あそこを越えてゆくのだ。

駒峰ヒュッテは木の香りのする新しい小屋だった。小屋番は女子学生が一人で、朝夕の賄いと弁当作りもすると言う。何でも山岳会に入ったばかりで、山らしい山へは登ったことがない、とのことだった。人手が足りないもので、ここでアルバイトさせられることになったのだらう。何でも短大で英語を勉強したけれど、仕事がないので介護士の専門学校に行っているということだった。

寝具は蒲団でなく、山小屋備え付けの

シユラフで、これは珍しいことだった。蒲団は干すのが大変だからかも知れない。夜間、強風の音が耳についた。それでも何時の間にか眠っていた。夜中に一度目が覚めたのは寒さのためだろうか。

早くシユラフに入ったせいも、翌朝は三時過ぎに目が覚めた。しばらくジッとしていたが、日の出は四時過ぎだと聞いていたので、御来光を見るためゴソゴソやっている、嶋倉さんが起き出した。奥さんは外へ出たくなめいと言った。嶋倉さんと二人で外へ出たが、風の中を山頂まで往復するのは面倒なので、小屋の前で日の出を待つ。今日も快晴のようだ。

四時四五分頃から東の空が赤く染まり、間もなく太陽が顔を見せた。嶋倉さんが盛んにシャッターを切っている。(つづく)



遙かなる戦火

内田幸彦

(八) 学校教練

現在の高校生の年齢になると、昔は教練という科目が正式な学科として週二時間であった。多分、日中戦争（一九三七～四五年）前後からではなからうか。東亜の盟主を目指した日本は軍事力を重視したのである。教科書は歩兵操典を中心に上下巻に別れていた。

教練、すなわち兵隊の下稽古である。入隊しても直ぐ間に合う生徒にしようという目論見があり、当時は普通教科より重要視された。先生は予備役軍人で、将校・下士官が多かった。予備役というのは、現役義務を済ませ、いったん帰宅して自宅待機となった軍人をいう。一方、現役とは、満一〇才で義務兵役中の兵をいう。

先生が、
「正面に向かって敬礼ッ！」

と命ずると、拳手の敬礼をし、目玉ひとつ動かしても《ヒンタ》が飛んでくる。

敬礼は教練における基本の姿勢とき

れ、特に厳格を極め、上官が手を下ろすまで、拳手を止めることは出来なかった。

教練で厭だったのは、背囊（軍隊の鞆）——今のランドセルに似ていた——が足りないことだ。銃は定数だけあったが、背囊は四五人分よりなかった。一組が五〇人だったから、五人は背囊がない。背囊なしに教練に臨もうものなら、《運動場五周の駆け足》を喰らう。それが厭さに、次が教練の時間だと、何を放つても武器庫へ駆けて背囊を確保せねばならなかった。時には喧嘩に発展したこともあった。不合理な話だが、戦争中は弱肉強食の無法な時代だったのである。

その日は突撃の訓練だった。講堂の後に土囊が八個横並びに立っている。大抵人間の大ききだった。ひと組八人が銃に着剣してその土囊に向かう。

「突撃ッ！」

の号令と共に

「ワアーン」

と喚声を上げて走り、敵に見立てた土囊を突き刺した。

第一列目から始まり、最後の列に私はいた。その日、私の組は何の都合か十人だった。目標の土囊は八つしかない。隣のMも気がついたらしく、目で尋ねている。私は講堂の壁に目配せした。Mも了解して、ニッコリ笑った。幸い教官は気付いていないらしく、

「突撃ッ！」

と号令を下した。二人は、

「ワアーン」

と講堂の壁めがけて突撃した。この時とばかり、普段の鬱憤を晴らすつもりだった。二人は、

「えいッ！」

とモルタルの壁に銃剣を突っ込んだ。念を入れて左右に銃をひねると、壁がバラツと落ち、フットボール程の穴がポツカリ口を開けた。

教官は一人を発見して飛んで来た。

「お前ら、土囊がないじゃないかッ！」

「でも突撃ですから」

教官は渋い顔を和らげ、

「まあいいか。元気があってよろしい」

と、その場をつくろった。

解散して武器庫へ銃と背囊を返しに

行った二人は、

「やったあッ！」

と小躍りして喜んだ。日頃つる鬱憤への、せめてもの反抗だったのだ。

一九四三年（昭和一八）頃は、靴（編上靴）は宝物だった。いくら物資不足の時代でも、下駄履きで教練は出来ない。裸足や下駄履きで教練に出ようものなら、ぶん殴られる。入学当時、配給のあった編上靴は表が大革で、靴底は紙を圧縮した粗悪品《ファイバー》だった。雨に履くと、ファイバーは水を吸って膨れ反り返る。そのため、学校へは下駄か草履で通い、貴重な編上靴は手に持った。食糧も衣服も日常雑貨も、何ひとつ自由には買えなかった時代に育った私達は、どちらかというと、お金より物を大事に考える。この靴はまだ履ける、この服があるのにと、新しい物が買えない悲しい習性を身につけてしまった。戦争の影はまだ生きているのだ。

ヒカル君の冒険 6

藤川博樹

ひきがえるのおたましやくし

三歳になったヒカル君は、毎日見るものすべてがめずらしく、嬉しくてしょうがない。

二軒長屋の隣には、ハルオちゃんが入居していた。はるおちゃんはヒカル君よりずっと年上の一年生だ。お母さんは、「はるおちゃんは一年生か、大きいね」といつも言っていた。

ハルオちゃんには、マーちゃんという妹がいて、ヒカル君より一歳年上だった。ハルオちゃんはいつも、二本のうどんのように鼻水を垂らしていたけど、いつも近所の男の子たちを引き連れて、あちこち冒険して

いた。引越してきた最初のころ、ヒカル君はいつもマーちゃんと自分の家の庭で遊んでいた。春になると、庭にはいっぱい菜の花が咲いて、まっ黄色になった。黄色い花畑で目の前が一杯になって、二軒長屋の庭が一つにつながってしまった。ヒカル君とマーちゃんは、いつも二人で庭にかがみ込んで、虫とか花とかを見ていた。そのうち、男の子のヒカル君は、ハルオちゃんにくっついて歩くほうが面白くなって、マーちゃんと遊ばなくなつた。短剣を腰に差して崖登りとか、魚採りとか、ハルオちゃんの遊びの方が、ダイナミックで面白かったから。

ハルオちゃんは駄菓子屋で短剣を買ってきて、得意そうに半ズボンの腰に差していた。ガラスでできていて、とてもかっこよくて、ヒカル君は欲しくてたまらなかつた。ヒカル君は、男の子たちの群れにくっついて歩いた。近くの小高い山の崖にみんなで探検に行った。小さいヒカル君だけどうしても崖の上まで登れなかつた。ハルオちゃんは、これにつつまれと言って、腰のバンドにさした

二丁のガラスの短剣につかまらせて。だけど、ヒカル君の腕の力は弱くて、ずつと短剣をつかんでいることができなくて、崖を登ることはできなかつた。

ハルオちゃんのお父さんは、釣りが好きで、日曜のたびに釣りに行って、バケツにいっぱいの魚を釣ってきた。ある日、ハルオちゃんが得意そうにバケツを抱えてきて、男の子たちに見せた。中には細長い銀色の魚が五匹泳いでいて、ヒカル君は目を見張つて見つめていた。いままで見てもない、夢のように輝いた宝物のように見えた。近くの田んぼの中を流れる小川までみんなを連れて行くと、ハルオちゃんは、バケツからビニール袋に魚を移して、魚採り網をかぶせたまま、川の中に流した。ハルオちゃんは川の流れに沿って走り、銀のうろこをきらめかせたアユ達は、ビニール袋の中に入ったまま、網の中を網と一緒に川を泳ぎ下つた。銀色の美しい魚たちは、ハルオちゃんの魚採り網の中にとらえられたまま、一生懸命泳いでいる。ヒカル君は、ハルオちゃ

んのその技が魔法のようにふしぎなことのように思えて、びつくりして目を見開いてみていた。

ハルオちゃんは、魚たちをすくい上げると、今度はずつと上流まで歩いて行って、またその技を披露した。またビニール袋ごと川に流したのだが、今度は、ビニール袋の形がくずれて、魚が二匹逃げってしまった。ハルオちゃんはあわてて魚を回収すると、下流に向かって走つて行って、網を振るつたけど、逃げた魚を取り戻すことはできなかった。ヒカル君は、あつちだあつちだと言つて、自分が魚を逃がしたみたいになり、必死になつて魚を追って行った。

翌日、またハルオちゃんの家前の道に、小学校から帰つて来た男の子たちが集まつてきた。だれ言うともなく、「さかなとりにいこう」ということになって、網とバケツを持つて集まることになった。ヒカル君の目は生き生きと輝いてきて、一生懸命走つて、家に飛び込むと、「おかあさん、おかあさん。バケツ、バケツ出して」と大きな声で叫んだ。「バケツつてなにするのよ」「はやく、

はやく、さかなとりに行くんだよ」やつとのことで、小さなおもちやのバケツをおかあさんに出してもらったヒカル君は、息を切らしながら、ハルオちゃんの家の前にかけた。

ハルオちゃんたち大きい子たちは、一足早く集まっていた。「ヒカル君がついてきたら大変だから、さきに行っちゃおう」としめしあわせて、いつせいに走り出した。ヒカル君が道にでてきたときには、もうみんな先の家の角を曲がって見えなくなっていた。ヒカル君は、わあわあ泣きながら、小さなバケツをぶら下げながら走って追いかけて行った。ヒカル君の三歳の足では、とても小学生たちの足には追いつけず、みんな林の向こうへ駆けて行ってしまった。

ヒカル君がハルオちゃんの家を引越してくる前、わんわんのお家の隣に住んでいた時、並んだ二軒長屋のつながっていない側の隣のカズノリちゃんが住んでいた。そのとき、カズノリちゃんとお兄ちゃんも魚採りにきていて、一部始終

を見ていた。カズノリちゃんのお兄ちゃんは、ハルオちゃんと同じ小学校に通っていて、みんなの顔を知っていた。お兄ちゃんは、なんてやつらだ」ととても怒って、厳しい顔をしていた。「ヒカル君、さかな採りにいこう」と言って、弟のカズノリちゃんとヒカル君はお兄ちゃんのあとをついて行った。

田の畦で、あちこちすくってみただけで、魚はなかなかとれなかった。近くに食用蛙の養殖池があった。こどもが網ですくったりしていると、崖の上の家の二階からおじさんが「こらー」とこどもたちを怒っているのをよくヒカル君はよく見ていた。その日は、だれも見ている人がいなくて、網ですくうと、巨大なおタマジャクシがいくらでもとれた。ヒカル君のバケツは、すぐに食用蛙のおタマジャクシでいっぱいになった。ヒカル君はもう泣き止んでいたが、浮かない顔をしていた。ヒカル君のバケツは一杯になったが、ヒカル君はちっとも嬉しそうな顔をしなかった。お兄ちゃんは、ヒカル君を喜ばせてあげようと、おタマジャクシ

をとってくれたけれど、お兄ちゃんの腕ではヒカル君を満足させることはできなかった。

ヒカル君の印象の中には、川の中を銀鱗をきらめかせて泳ぐ夢のようなきれいな魚が忘れがたくすみづいていた。ヒカル君は、小学生ぐらいの腕では、そう簡単に魚採り網で魚をすくえるものではないということを知らなかった。ハルオちゃんたちはあんなきれいな小さい魚を採りにいったのだと思っていた。だから、食用蛙のおタマジャクシがつまらなかった。

ヒカル君はお兄ちゃんとカズノリちゃんと別れて、家に帰った。縁側においておいた子ども用の赤いバケツに、巨大なおタマジャクシがいっぱいになっているのを見て、おかあさんはギョツとなった。

ヒカル君はこのことをずっと忘れないでいて、大きくなってから小さい子どもをとてかわいがった。小さい子どもといつまでもいつまでも一緒に遊んでやり、川へつれて行ったりして遊んだんだ。



モーツアルトの 『クラリネット協奏曲イ長調』

瀧本文彦

高校二年の秋だった。学校から帰り、家の二階にあった和室三畳の自室に入り、窓を開けて空気を入れ換え、窓枠に腰を掛けて外の景色を見ていた。夕日が沈む前で、空の茜色が美しかった。

小型のラジオが部屋にあった。何気なくスイッチを入れると、クラリネットの音が聞こえてきた。そのメロディーにオーケストラの伴奏が加わった。聞きながら、茜色に染まった夕日を眺めていた。

突然、感動が襲った。夕日と音楽が溶け合った。どう形容していいのかわからない。言葉にできない感動だった。偶然に出合ったクラリネット協奏曲のメロディーに、ルオーのキリストの絵を思い出した。

それは何と優しい品のあるメロデー

イーだったことか！クラリネット

の上下に移動する音の彩り、まろやかな音色。表情豊かな明るいメロディーが急に翳る。翳ったメロディーが急に明るさを取り戻す。この変わり身の早さは何だろうか？僕は本能的に、この作曲家に「淋しさ」を感じた。

ラジオのスイッチを入れてこの曲を耳にした時、誰が作曲したのかも、何という曲かも知らなかった。初めて耳にした曲だった。音楽を聴いて涙がこぼれてきたのは、初めてであった。これ以後も、涙したことは一度もない。あれは何だったのか？

曲が終わると、

「モーツアルトの『クラリネット協奏曲イ長調』でした。」

とアナウンサーが言った。初めて聞く音楽だった。

何故、涙がこぼれる程に感動したのか。美しい光景を見、美しい音楽を聴いたからか。友達もなく孤独だったからか。家庭にいざこざが絶えなかったからか。愛に渴望していたからなのか……。理由は、まだ他にありそうな気がする。

その頃、死について考えることがあった。死とは何か？人間が死んでゆく時、どのような苦しみがあるのか？蒲団に入って寝る時、底なし井戸に永遠に落ちてゆく自分を想像した。そういった年齢に達していたことに関係するのかも知れない。

理由は見つかりそうで見つけられない気がする。しかし、モーツアルトの『クラリネット協奏曲イ長調』を聴いて、淋しくなったことは確かだ。悲しくなったのではない。楽しくなったのではない。勇気づけられたのではない。かといって、ただ美しいだけの音楽でもなかった。

この曲の第一楽章・第一主題を聴いて、僕は「諦念」「無常」という言葉を思った。病に苦しむモーツアルト、死を予感したモーツアルト、死

を友として生きてきたモーツアルト
……。

モーツアルトはクラリネットという楽器が好きだった。まろやかな音色が多彩に変化する、表情豊かな木管楽器——この楽器を改良した時、モーツアルトはこの楽器の虜になっ

た。
長調の曲は明るいというのが一般的な概念である。けれども、この曲には、長調であっても、「翳り」というか、「淋しさ」を感じる。モーツアルトには、短調の曲より、長調の曲が圧倒的に多い。しかし、長調で書かれていても、モーツアルトの曲にはしばしば哀愁が漂う。そして、長調の楽曲に、突然何の前触れもなく短調のメロディーが顔を現す。その変わり身の早さがモーツアルト・ファンを惹きつけるのだろうか。